

タイトル：底無しの『かもめ』(チェーホフ作)

『かもめ』の作者アントン・チェーホフ(1860-1904)は、今でも世界で人気のある十九世紀ロシアの作家。スラブ文学研究者の沼野充義氏は、テレビ番組(※)で、彼の作品を”つかみどころがない”と語った。確かに、前期課題に取り組み始めてから、『かもめ』を自分の言葉で説明することは空をつかむようだと思った。論文を読み、原作を日本語訳だけでなく、一部でも英語訳で確認した。手が空いていない間は、実写版映画や宝塚歌劇団の過去公演の動画配信、Audibleで配信されているチェーホフの他作品などを流し、耳で聞いた。劇中に登場する作品『椿姫』を、原作とオペラで鑑賞して、作品に挿入される意味を考えた。ただ寝る前は、実写版映画を流したい。ピアノの演奏が聴きたいからだ。

『かもめ』のあらすじ

『かもめ』は四幕から成る戯曲。物語の舞台は、ロシアの田舎にあるソーリン家の領地。季節は夏。モスクワからの来訪はあるが、舞台は領地から外に出ない。狭い世界で、夢と絶望、憧れと幻滅、青春と老い、愛と嫉妬の劇が繰り広げられる。第三幕と第四幕の間に、二年の時間が過ぎるが、第一から第三幕は、ある夏の、それほど長くない期間の日常である。

主要人物は若い二人だ。ソーリンの甥で二十五歳のトレープレフは、作家を目指し、伯父の家に住む。ニーナは近くの裕福な地主の娘。十八～十九歳で、女優志望。第一幕は、恋人同士の二人が使用人たちと一緒に、湖畔の舞台で素人芝居を上演する。戯曲の登場人物は、観客として勢揃いする。トレープレフに片想いをする、ソーリン家管理人の娘マーシャや、彼女に片想いをする貧乏教師のメドヴェージェンコ等。観客として、戯曲の中でも重要なのは、トレープレフの母で、四十三歳の有名女優アルカージナと、彼女と一緒にモスクワからやってきた、有名作家のトリゴーリン。二人は、度々新聞に浮名を流す愛人関係である。この二人は、自分達の芸術に対する強い信念と、確立された考えを持っている印象だ。この二人の来訪が、将来を夢見るトレープレフ・ニーナの静かな生活に、一瞬で波紋を呼び起こす。

『かもめ』が喜劇とは？

チェーホフは『かもめ』を喜劇と銘打ったが、悪戯好きであった彼の悪戯と解釈されたり、喜劇とは思えないとの感想が圧倒的であったりしたし、今でもそうだ。しかし、チェーホフの来歴を知り、少し理解できるようになった。

彼は二十代半ば、「テェホンテ」のペンネームで新聞に短編小説を書いていたが、その時代は「お笑い作家時代」、その時期の作品は「ユーモア小説」と評価されている。(※)その作品群の中には、ユーモア作品と思えない作品がある。その代表として二つを挙げる。『ワーニカ』は、九歳の少年が見習い奉公先から、唯一の頼りの祖父に助けを求める手紙を書き

送る話だが、手紙が決して届かないことを匂わせて終わる。『ねむい』は、十三歳の少女が住み込み奉公先で家事と子守りで疲れ果て、眠るために赤ん坊を殺してしまう話。これらがユーモア作品とされているのだから、『かもめ』を喜劇と銘打ったとしても不思議ではない。ふとそう思った時、正しい研究は研究者にお任せし、ロシア語を読めない私なりの解釈でも、『かもめ』を語ってみたいと思った。

『かもめ』がトリゴーリンの表現力を証明した

登場人物トリゴーリンには、チェーホフ自身が投影されている。それは、ウラジーミル・ナボコフが、アメリカの大学でロシア文学の講義を行うために書いた草稿(※)において、触れた事だ。ナボコフは、検閲の厳しいロシアから亡命し、英語・ロシア語の二言語で同一作品を書いた作家でもあるが、彼のロシア文学の講義は客観性と説得力がある。ナボコフは、トリゴーリンについて、こう書いている。

方や世間にまだ認められず大した才能のもちぬしでもない息子のトレープレフは、本物の作家トリゴーリンに嫉妬している(ついでに言うなら、このトリゴーリンは職業作家チェーホフの分身でもある)『ナボコフのロシア文学講義(※)』277 頁

トリゴーリンはチェーホフの分身であればこそ、『かもめ』は喜劇となり得る。ナボコフは、作品のシンボル”かもめ”について、このように書いている。

トレープレフはこのシンボルの用い方を誤っている『同』284 頁

トリゴーリンは、第二幕の最後に短編の題材を得るが、それはチェーホフ『かもめ』にそっくりだ。トリゴーリンがチェーホフの分身なら、劇中でトリゴーリンが得るアイデアが作品化されたものが、チェーホフ『かもめ』として成立した、と考えることができる。チェーホフは、トレープレフが用い方を誤った“かもめ”を、必要な位置に配置し、見事にシンボル化した。トレープレフが芝居で表現しようと試みた「人間の滅び去った世界」を、“かもめ”だけで表現した。その圧倒的表現力を証明したのが『かもめ』であり、その意味では喜劇である。

しかし、トリゴーリンはチェーホフそのものではない。イコールで結んでみると、その差異が強調される。決して報われない恋をするマーシャの心境を、チェーホフは彼女に語らせる。

なんだか、大昔に生まれたような感じがして。人生をまるでドレスの果てしなく長い裾みたいに引きずって…。まるっきり生きる気がしないこともしょっちゅうだし。

(※)

マーシャの悲しみに共感しなければ書けないだろう。トリゴーリンが人の感情に無頓着に見えるほど、『かもめ』だの表現力は迫ってくる。それは次々と疑問を生む。例えば、なぜチェーホフはトリゴーリンを冷静沈着に描いたのか、等。『かもめ』は、エンドレスに問いかけてくる「好き」を通り越した何かだ。

(※)「NHK100分で名著」／チェーホフ”かもめ”第1～4回

(※)『ナボコフのロシア文学講義』として収録・出版された

(※)『チェーホフ 七分の絶望と三分の希望』／沼野光義／講談社／2016年

(※)2013年／小笠原豊樹訳／河出書房

(※)『かもめ』沼野充義訳／2015年